

# 大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

## 「図書室だより」と「二次資料の翻訳」について

今 井 淑 子

(京都大学工学部金属系図書室)

### 1. 翻訳の動機

金属系図書室は冶金学科と金属加工学科の二つの教室(12講座)から成っています。前身である探鉱冶金学科が設立されたのは、明治31年ですから、工学部の中でも古い教室図書室といえます。現在、蔵書冊数は2万7千冊、購入外国雑誌は120タイトルで、一年間の資料購入量は講座専用図書も含めて約830万円です。教室構成員は教職員66人、大学院生、研究生など89人、4回生69人、3回生75人です。これを図書職員1人で運営しています。私は以前、研究室事務をしていましたが、前任者が退職し空席となっていたところへ配置換えで来た訳で、図書に関する知識は全くありませんでした。大図研の会員の中には、図書の仕事がしたくて、資格を得て就職され、日常業務のかたわら、研究に励まれている方が多いと聞き、肩身のせまい思いをしています。

さて、私がまだ充分仕事に慣れず、四苦八苦している時に、経済学部図書室の閲覧掛から「閲覧室だより」が送られてきました。これには、新着案内をはじめ、様々なニュースとともに資料の紹介や検索の仕方など、興味ある記事がいっぱい書かれていて、新鮮で私は大変感激しました。第5回職組教研レポートの中でも編集者の一人である沢居さんは、

「閲覧室だよりの発行と展望」と題して次のように書かれています。(……時の経過が仕事の確実な積み重ねになるよう関係者の知恵と力を集めることができるなら、その展望は大変明かるいものでしょう。閲覧室だよりという小新聞の発行は、それが利用者の要求を基礎に、日常の仕事と研究とが結びついて持続されるとき、よりよい図書室作りの力が発揮される契機となるにちがひありません……)そして私も、いつかはこのような、図書館活動をしたいと思い、一昨年11月にやっと第一号の発行にこぎつけました。はじめ、教室図書委員会に提案したところ、「一人なんだから頑張って仕事をふやすことはないですよ」という暖い助言(牽制?)もありましたが、とにかく承認されました。発行は月刊とし、はじめはA4版湿式コピーでしたが、現在はB4手書きのファックス印刷で100枚刷っています。配布は各講座に教職員数プラスαと学部学生用として図書室においています。記事の内容は次のとおりです。

#### ① 購入図書リスト

その月の購入決定図書の著者、書名、金額と所蔵場所を記入しています。教室会議メンバー(教授、助教授、講師)以外には唯一の手がかりになっており、院生からの問い合わせも多いです。

## ② おしらせ・おねがい

教室図書委員会の報告や工学部図書室からの情報です。最近では外国雑誌の経費節減とそのアンケート調査の結果が何回かつづけてのりしました。また、近年、目まぐるしく改善された文献複写や相互利用システムの宣伝にも大きな威力を発揮しています。

## ③ 図書室の仕事の紹介

これは本の発注、受入れなどの流れをフローチャートで図示しました。まだ始めたばかりですが、スタッフマニュアルとして整備してゆきたいと考えています。仕事を公開することで「この部分のチェックはどうしているのか」等の指摘もあり、合理化に役立つことでしょう。

## ④ レファレンス

参考図書解題というシリーズを作り主な二次資料の紹介や具体的な使い方などを連載しています。この作業が、この小新聞づくりにおいて最もむづかしいものになり、自分自身の主題に関する知識の不足を痛切に感じさせられました。これが今回のUse of Engineering LiteratureとGuide to Reference Bookの2冊の図書の金属に関係のある部分の翻訳という仕事の動機となりました。

## 2. 作業手順

金属系教室では、その2年前から技官の勉強会が、時間内につづけられていました。そのテキストとしてこの2冊の参考図書の翻訳を提案し、採用されて、私も参加した訳です。この勉強会は54年9月から次の年の3月まで続きました。助手の先生と院生1人をチューターに、あと6～7人位が生徒で、それぞれ割り当ての頁を順に翻訳し発表してゆくという方法でした。辞書を引くだけでも大変ですが、専門用語ばかりで少しも意味が通じなくて途方にくれたものです。結局、チューターが、意味の通じる程度にまとめて下さったというのが本当の処です。

この作業の経過の中で気がついたことを、2・3述べます。

そのひとつめはUse of Engineering Literatureの金属編は情報が古すぎるということです。この中には、図書が94点、Abstract Indexが20点、雑誌が42点、Review 6点紹介されていますが、雑誌の42点をとってみると、その約半数がすでに誌名変更もしくは廃刊となっていることです。また図書についても古い版で紹介されているものが多いようです。

2つめには英文の文献に限られているということです。図書94点はすべて英語ですし、Guide to Reference Booksについても金属のセクションにある44点のうち43点までは英語です。またUse of Science Literatureの94点とGuide to Reference Booksの44点との関係ですが両方に含まれているものは、たったの13点なのです。またその13のうちGuide to Reference Booksの金属の項EJ 274～EJ 317の枠内で紹介されているものは、7タイトルで、残り6タイトルには、他のセクションに入っており、それは主として化学系中の文献です。Use of Engineering Literatureは、このことから主題について大変コンパクトにまとめられていることがわかります。同時にこれは、金属だけではなく化学系のセクションも読む必要があるということです。

あと情報を新しいものに訂正したり、よみやすい文章に直して所蔵場所を入れたりすれば、一定まとまったものになります。またこれら2つの文献をひとつのものにまとめ、他の知識も入れて金属系で学ぶ学生、研究者のためのガイドブックにできれば、申し分ないのですが、日常の仕事に追われて道は遠いというのが実感です。

## 文献紹介

Mount, Ellis

University Science and Engineering Libraries:  
Their Operation, Collections, and Facilities.

Westport, Conn.: Greenwood Press. 1975 214p. \$15:00

竹 村 心

(京都大学教育学部図書室)

Ellis・Mount は、1964年からコロンビア大学の理工学図書館に司書として在職し、現在、同大学の図書館学校の教授である。

この著書は大きく分けて二つの部分から成る。一つは、理工学図書館の特質について述べられている部分と、もう一つは、初歩的で基本的な各種の理工学文献の選択書誌の部分である。

前半部分の理工学図書館の特質については、(1)図書館の組織と機能、(2)運営、(3)人事・職員管理、(4)収書(廃棄も含む)、(5)施設と設備、(6)相互協力(例えば、他大学図書館や図書館諸団体との相互協力、産業や官公庁等との相互協力)を内容とするものである。

著者は、この部分で、豊富なデータと多くの引用文献を駆使し、数多くの事例をふまえ、基本的原則と実務を述べている。論旨も概論的でなく、具体的でわかり易い。

但し、コストデータは1973年のものであるので、物価上昇分は注意する必要がある。

その中でも、やや詳しく述べられている事柄として、(1)選書・収書、(2)保存、(3)マイクロフィルムの利用(テクニカル・レポートや他のマイクロフィルム等によるリーダー・プリンターの活用法)がある。

この著書は、理工学図書館の運営と機能の諸問題を考える上で、図書館員だけでなく、図書委員にとっても大変役立つものである。

それは同時に、これから理工学図書館で働こうとしている人にも満足するものとなっている。

著者は、理工学図書館での実務経験を活かし、陥りやすい誤りや見落としがちな問題に注

意を喚起し、具体的解決策を示しながら、基本的原則を述べている。

この著書の後半は基本的な各種の理工学文献の選択書誌から成っている。

初歩的で基本的な各種の文献はその種類に応じて吟味されて取りあげられている。そして、ここで取り扱われたすべての文献はその内容について注釈されている。現在、出版されている理工学分野の文献案内の中で最も新しく優れたものの一つであろう。

この文献案内で取り上げられているものは、ハンドブック、定期刊行物、抄録誌は言うに及ばず、アニュアルレビュー、テクニカルレポート、特許資料、ダイレクトリー、スタンダード、シソーラス、数値表、データバンク、視聴覚資料が含まれている。

しかし、会議録やテクニカルレポートは充分とは言えず、非常に限定して選択しているため、理工学図書館でよく使用される基本的な参考図書が含まれていないものもある。

むしろ、この選択書誌よりも内容的にも又、範囲のうえでもより多く扱われている文献に、Dennis GroganのScience and Technology: An Introduction to the Literature (2nd ed., Shoe String Press, 1973)がある。

又、巻末索引はもう少し詳しくすべきであらう。

大図研京都大学班は、全国研究集会へむけて「資料研究をいかにすすめるか」というレポートを作成しているが、このレポートの作成過程で、工学部、理学部の会員から自然科学系図書館では、「資料研究」のイメージ

が具体的にないという意見が数多く聞かれた。

確かに、人文・社会科学系図書館とは性質を異にする自然科学系図書館において、書誌研究や収書・蔵書構成等の研究が、必ずしも学生や教員の情報要求とは直接に関連しない状態にある。この事は京都大学工学部金属系図書館の実践で明らかになっている。

一方、京都大学では、自然科学系図書館は教室図書室として発展して来た。従って、図書館組織として大変不十分なものであり、又、図書館員も1名という少数な場合が多く、図書館サービスも充分行なわれてこなかったという経過がある。

しかし、大図研は、大学図書館において教室図書室・部局図書室こそ教育・研究のフロントであり、そのフロントをバックアップする組織が中央館（附属図書館）であると位置づけ、教室図書室・部局図書室の発展に努力

することを、1981年全国研究会京都支部報告の中で確認している。

大学図書館のフロントである教室図書室で構成されている自然科学系図書館の発展を願う立場から、図書館の先進国であるアメリカの自然科学系図書館の現状と課題を知るために、適切な資料を探していたところ、この著書の内容を知り、現物を読んでいるうちに、この本のすばらしさを知って、翻訳を決意した。

しかし、一人で翻訳するには、実力も時間もないので、京都大学の自然科学系図書館の図書館員に共同で翻訳することを提案し、4月12日、13名の図書館員で翻訳することを決定した。

この著作に述べられている図書館運営を実践するならば、理工学図書館の発展に貢献すると確信している。

なお、この翻訳活動の中で、3名を大図研に新しく迎えることが出来たことを付記する。

### 3 月 例 会 雑 会

渡 邊 幸 子

(滋賀医科大学附属図書館)

文部省の部内資料的パンフレット「おぼえておきたい教育英会話」の中に次のようなQ & Aがある。

Q: What kind of reserach does the Ministry place emphasis on?

A: Energy research, including controlled fusion, space science, accelerator science and nuclear physics, prediction of earthquakes and volcanic eruptions, marine science, and cancer research.

かねてから私はこの中の加速器科学というものがあるものや想像もつかないままに調べることもせずやりすごしていた。3月例会で小沼先生の話を書き始めて、それ

が素粒子物理学と関連する技術であることを知った。

小さな小さな素粒子(小さいが故にそれはエネルギーのかたまりであるのだそうだ)のなかみを調べるためにそれを破壊する。その実験装置が直径2kmもある馬鹿デカイ加速器なのである。その衝突をより高いエネルギー領域で起こさせるためにより大きな、あるいはより工夫された加速器が必要なのだということを知って私は一人驚きそして納得した。

「80年代の科学・技術と学術情報」という大きなテーマだったが先生はそれを自分の専門分野の素粒子物理学の最近の話題(チャーム粒子の発見)をわかりやすく解説しながら、その情報がどのように伝播していったかを面白く話してくださった。「チャーム粒子の発

見」については「自然」'75年3月号に、研究情報流通については同じく「自然」'77年12月号に掲載された先生の論文に詳しい。どこの図書館にもある雑誌だから読まれた方も多いかも。私は先生の話を書ききってさっそく読んでみた、と言いたいところだが、本当は年度末の仕事の忙しさに流されていたところ、事務局会議でお会いした酒井委員長が「例会のあと自然の論文読んだよ、講演内容は殆んど書かれていたよ」と何気なく言われた言葉にハッとして（私より数倍多忙な人がすぐ読んでいる!!）、やっとその翌日、即ち今日、製本された重たいのを持ち帰り読んでいるしだいである。それぞれの号の「もう一つの目次」に先生の紹介がしてあり、「僕は今回のテーマが気に入りましたね……」と終始楽しそうに素粒子と、情報あるいは図書館のことを話されたワケが少しわかった気が

している。で、講演内容と先生の紹介はせずにおく。左記の雑誌を是非読んでほしい。

参加者の質問に答えて、「研究者と図書館員でどう図書館づくりをすすめていくか」、「現在進められている学術情報システムをどう考えているか」、「科学者の責任」等についても話された。

科学者の役割の一つに私は科学知識のpopularization ということがあるのではないかと考えている。最近一般向けの科学雑誌があいついで創刊されたが一流の専門家がどんどんこういう仕事をしてほしい。そしてその時、まだわかっていないこと、失敗したことなども知らせてほしいものだ。素粒子物理学というようなカタイ話をこんな風に話してください。今回の例会はそういう点でも意義があったのではないかと思う。（6大学図書館17名参加） 1982. 3. 20

## 5 月 例 会 案 内

今、図書館員は、図書館発展のために何をなすべきか。

— 1982年大学図書館問題研究会全国研究集会 —

学術情報システムに大きく揺れ動く大学図書館界で、今、私達は、大学図書館の総合的発展を創造する為、何をなすべきなのか。

利用者研究、資料研究、図書館員の研修制度など、具体的なテーマを通じて、大学図書館員の役割を明らかにします。

京都支部委員会は、この全国研究集会を5月例会として企画しました。京都の大学図書館員が積極的に参加されることを心から訴えます。

### 開 催 要 綱

◎日 時 1982年5月15日(土) 1:30 ~

16日(日) 3:00

◎場 所 真成館

◎日 程 5月15日(土)

1:30 受付開始

2:00 開会・全体会

~ 3:00

3:10 分科会

~ 5:30

5:30 休憩

~ 6:30

6:00 交流会(夕食)

~ 8:30

5月16日(日)

9:00 分科会

~12:00

12:00 昼食

~ 1:00

1:00 全体会

~ 3:00

内 容

全体会 大図研として研究活動をどのようにすすめるか。

分科会

第1分科会 教育研究に役だつ図書館づくりに、図書館員はいかに参加するか。

第2分科会 利用者サービスを高める利用者研究及び資料研究をいかにすすめるか。

1) 利用者研究

2) 資料研究

第3分科会 図書館員の力量を高める研修や制度的保障をいかに確立するか。

申し込み先

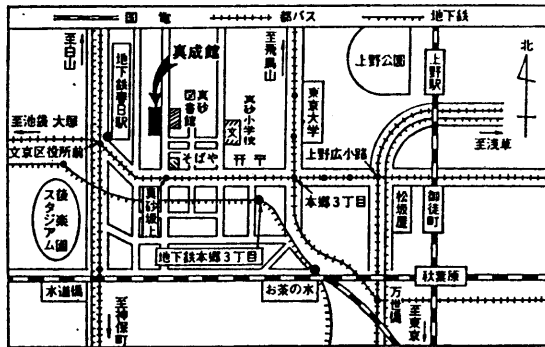
〒606 京都市左京区吉田本町  
京都大学工学部情報工学図書室内  
〒751-2111 (5890)  
白 神 順 子

※宿泊費はあらかじめ現金書留でお送り下さい。

※お申し込みは、なるべく大学単位でお願いします。

参加会費及び申し込み方法

集会参加費	1,000円
交流会参加費	3,000円
宿泊費	7,000円
保育費	実 費



真成館

〒113 東京都文京区本郷4丁目25号  
〒(03)812-2221 (代)